様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 6 日現在

機関番号：34316
研究種目：基盤研究(A)
研究期間：2008～2012
課題番号：20242003
研究課題名（和文）　ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究

研究課題名（英文）　COMPREHENSIVE DATA COLLECTION OF GANDHARAN ART AND ITS INTEGRATED STUDY

研究代表者
宮治　昭（MIYAJI AKIRA）
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：70022374

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史
キーワード：ガンダーラ、仏教美術、東西文化交流、仏伝図、仏像、クシャーナ朝、菩薩像、仏三尊像

１．研究計画の概要

アジアとヨーロッパを結ぶシルクロードの中間に位置するガンダーラは、諸文化が衝突と融合とを繰り返した東西文化交流の要衝であった。インドから伝来した仏教もこの地で変容発展し、東アジアにまで多大な影響を与えた。ガンダーラを巡っては膨大な研究の蓄積はあるものの、考古学的発掘は不十分で、多くのガンダーラ彫刻が流出し、ガンダーラの全体像を把握しうる網羅的研究はいまだみない。さらに近年では浮彫彫刻のみならず経典資料や刻文も発掘・発見され、改めて国内外の遺物を再調査する必要がある。

こうした状況下で本研究は（１）「ガンダーラ美術の資料集成」と（２）「ガンダーラ美術の統合的研究」という２つの目的を持ち、ガンダーラ美術の総合的なデータベースを構築するとともに、美術史学、考古学、歴史学、仏教学、仏教史学を結ぶ視点からガンダーラを捉え直す新たな研究を目指す。

（１）ガンダーラ美術の資料集成

パキスタン、インド、アメリカ、ヨーロッパ、日本などの博物館・美術館・寺院・個人などに所蔵され、散在するガンダーラ美術の実地調査を行う。調査後にはすみやかに協力者の協力のもとにデータベースの作成を行う。併せて過去に行われた研究代表者・分担者の調査により集積されたデータの集成も行う。

（２）ガンダーラ美術の統合的研究

研究分担者によって、以下の 5 つの側面から研究を進める。①考古学と文献を合わせたかたちでの歴史、②モティーフ・図像・守護神などの比較研究（ギリシア・ローマ、イラン、インド、中央アジアとの比較）、③図像解釈論、④ガンダーラの仏教信仰（僧団と在俗信者との関わり）、⑤ガンダーラ仏教美術の影響（インド・東南アジアへ、中央アジア・東アジアへ）である。上記の多角的な学際的研究によって、ガンダーラ美術の諸相のみならず、ガンダーラ地域社会における宗教・文化のあり方をより明確に提示する。

２．研究の進捗状況

上述の（１）ガンダーラ美術の資料集成については平成 20 年度にインドの博物館（計 7 館）、平成 22 年度にヨーロッパの博物館（計 4 館）、平成 23 年度にアメリカ・カナダの博物館（計 7 館）において収蔵品の実地調査を行った。なお、国内寺院・個人所蔵の作品は今迄に 163 例を調査した。これより 1290 例の作例を撮影し、その画像についてはデータベース化に向けた準備を整えている。

（２）ガンダーラ美術の統合的研究

平成 20 年 5 月 17 日に研究代表者・研究分担者・研究協力者がそれぞれの研究担当を確認した後、研究会を年 4 回行った。平成 21 年度より研究会をテーマ毎のミニ・シンポジウム形式として、同年は計 4 回の研究会を開催した。平成 22 年度は計 3 回、講演会を 1 回行った。これより、研究代表者 2 回、研究分担者 23 回、研究協力者 8 回、ゲストスピーカー8 回が多彩な視点より発表した。さらに参加者全員での議論により、従来の個別の成果を整理統合し、ガンダーラ美術について複眼的な視野で考察を行うことが出来、不明な点の多いガンダーラ美術の諸相を浮彫りにしたばかりでなく、大乗仏教の興隆や浄土思想との関わり等、仏教史上の諸問題についても新たな知見が得られた。なお上述の③図像解釈論の問題については研究会と別にこれ

まで５回の小部会を開催し、主に仏伝図の解釈を巡り、仏教学と美術史の研究者とともに大学院生も多数加わり、文献と美術の連関と背景にある思想について考察を行っている。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。
調書に記した如く、上述（１）の目標についてはインド、ヨーロッパ、アメリカの博物館・美術館のガンダーラ美術の調査に関しては収蔵庫内の作品調査も含めほぼ終了し、キュレーターとも交流して新たな知見を得ている。日本国内のガンダーラ・コレクションについても調査を進めることが出来た。さらにこれまでに蓄積した画像を加えて、資料集成に向けて着々と作業が行われている。
（２）の目標においても前述のように、研究分担者が各自の専門によるアプローチから発表を行うのみならず、シンポジウム形式を加えたことで、毎年当初の計画よりも多く研究会を開催した。ゲストスピーカーも交えて上述５つの側面にそったテーマを設定し常に最新の研究報告がなされ、ガンダーラの仏教の具体的な様相にいたる議論がなされた。その成果をまとめた中間報告書を作製中である。

４．今後の研究の推進方策
上述（１）については、23年度には調書に記した如く、パキスタンで現在行える範囲の実地調査を行う。24年度は過去4年間で漏れた機関の調査および統合的研究に必要な調査を行う。今後は国内所蔵品を重視して調査を行っていく。並行して画像データベース、分類ごとのリストも完成に向けて追加、最終調整を行う。また、ガンダーラ美術の他地域への伝播の諸相を明確にする上で、必要となるガンダーラ以外の各地域（インド、中国、中央アジア、中近東など）での調査を実施する。
（２）に関して 23 年度は年 3 回以上の研究会を継続する。最終年度は、年度始めに、報告書（資料編・研究編）の執筆分担および公開シンポジウムに向けた計画を立て、補足すべき研究・調査の有無を確認する。そしてこれまで収集したデータをもとに、研究分担者を中心メンバーとして欧米の研究者も招聘し、ガンダーラ美術の公開シンポジウムを開催する。これをもとに個々の研究分担者や研究協力者が報告書および研究論文を作成し、研究編は出版物として公刊することを目指す。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 35 件）
① 田辺勝美、ガンダーラ美術の図像学的研究(4)成道後の釈尊の安楽座像と新出カーピシー派彫刻の制作年代、古代オリエント博物館研究紀要、29-30 号、pp.83-136、2010、査読有
② 芳賀満、中央アジアの古代地中海文明と古代オリエント文明～ウズベキスタン共和国オクサス河畔ギリシア・クシャン系都市カンピール・テパの発掘現場から～、地中海学会月報、336 号、p.5、2009、査読有
③ 入澤崇、イランの仏教遺跡、印度学仏教学研究、58-1 号、pp. 215-222、2009、査読有
④Akira Miyaji、Iconography of the Two Flanking Bodhisattvas in the Buddhist Triads from Gandhara Bodhisattva Siddhartha, Maitreya and Avalokitesvara、*East and West* vol.58 nos.1-4 、pp.123-156、2008、査読有
⑤ 佐藤智水、中国における初期の「邑義」について(中)銘文編 I、仏教文化研究所紀要、46 号、pp.181-237、2008、査読無
⑥ 永田郁、南インド・アーンドラ地方の宗教美術の様相について-なぜ菩薩像が造形されなかったかを巡って-、崇城大学芸術学部研究紀要、2 巻、pp.69-90、2008、査読無

〔学会発表〕（計 38 件）
① 宮治昭、中央アジアの仏教信仰と美術-涅槃図と兜率天の弥勒菩薩を中心に-、龍谷大学アジア仏教文化研究センター第 2 回国内シンポジウム「中央アジアにおける仏教と異宗教の交流」、2011 年 2 月 26 日、龍谷大学
② Yasuko Fukuyama 、 Iconographic Development of the Miracle of Sravasti at the Ajanta Caves 、 International Conference: Buddhist Narrative in Asia and Beyond、2010 年 8 月 10 日、The Imperial Queen's Park Hotel, Bangkok
③ 岩井俊平、バーミヤーンの十字型ストゥーパ、第 16 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会、2009 年 7 月 4 日、金沢大学
④ 入澤崇、ムルガーブ川流域への仏教伝播、第 59 回日本印度学仏教学会、2008 年 9 月 4 日、愛知学院大学

〔図書〕（計 21 件）
① 田辺勝美、中央大学出版部、中央ユーラシアの文化と社会、2011、pp.3-95
② 山田明爾、構成出版社、新アジア仏教史 05 中央アジア、2011、pp.14-61.
③ 宮治昭、中央公論美術出版、インド仏教美術史論、2010、pp.1-701.